

石坂産業株式会社(埼玉県三芳町)の魅力

地獄の釜のような暑い夏がようやく終わりを告げて、心地よい風が吹き始めた頃、会社敷地内に鎮座したコンクリートの塊と乾燥させたスラッジの山をぼんやりと眺めていた。私は、庄内町で生コンクリート工場を営んでいる。

これらは、マニフェストを発行し産業廃棄物として処理される代物だ。では、なぜ発生するのか。注文を受けた生コンクリートは工場で練り、ミキサー車に積み込まれて工事現場へ運ばれていく。そこで、余剰となってしまった生コンクリートや、何らかの理由で返品されてしまった生コンクリートが産業廃棄物へと姿を変えてしまうのだ。惜しい。もったいない。原材料である砂利も砂もセメントも混和剤も水も、全てお金で買ったものだ。産業廃棄物として適正に処理業者から引き取ってもらった後は、破碎処理後、路盤材として使用される。結果的には、しっかりリサイクル。だからよいと言えばよいのだが、当然のこと乍ら、処理費用が発生する。敷地内の産業廃棄物を目にする度、工場内で再生できないものかと臆げに何年も考えていた。そのような時、『ごみをごみとして終わらせない。石坂産業の「循環」の物語』と出会った。石坂典子社長。お美しくて、すごく強そう。年齢も近い。我ながら、勝手な親近感を覚えたのだ。

1999年、埼玉県某市で生産された農産物から、高濃度のダイオキシンが検出されたという報道があった。住民たちの怒りの矛先は、ダイオキシンの発生源である焼却炉を所有している産廃業者へと向かう。2001年には、撤退・廃業を求める行政訴訟となり大バッシングの嵐だ。彼女と当時の社長であったお父様の決断は、売上の7割を占める焼却事業からの撤退だった。騒動となる5年前に、15億円を投じて最新鋭の焼却炉を導入している。ダイオキシンを発生させていたのは石坂産業ではない。しかし、世間の反発が強過ぎて焼却事業を続けることは不可能だと経営判断したのだ。代わりに、①建設現場で発生する解体資材の減量化とリサイクルに注力、②騒音や塵埃が外に漏れないよう屋内型プラントの建設、2つの事業に大きく舵を切った。会社の生き残りを賭けた一世一代の大勝負。これがまた困難の連続なのである。行政機関とひたすら粘り強く対話を続け、ホテルの生育や地元の道路清掃ボランティアといった地道な活動を続け、次第に理解者を得ていく。社外からの激しい批判で窮地に陥っていた時は、社内も大混乱。荒っぽい気性の男性が多い中で、環境マネジメントシステムISO9001と品質マネジメントシステムISO14001という国際規格を取得すると、石坂典子社長が宣言したからだ。石坂社長は、社長就任後半年で約4割の社員が退職するといった強烈な抵抗を跳ね除け、見事に国際規格を取得し、産業廃棄物の究極の再資源化を追求した。

かつて、地域住民から「ここから出ていけ」と言わんばかりに行政訴訟を起こされた会社は、地域の里山を保全・再生し、そこへ散策路やカフェ、アスレチックを

整備した。その根底には、「産廃処理と里山保全の現場を持ち、環境教育に取り組むというブランディング」にある。

私は考えた。彼女と私の、最も大きな違いは何だろう。それは、並外れた「愛」だ。社員への愛。地域への愛。父である創業者への尊敬と愛。そして、仕事への深い愛。とにかく、愛が駄々洩れなのだ。

私も、もっと愛を持って仕事に取り組んでみよう。何かが変わるかもしれない。

(参考文献 「五感経営 産廃会社の娘、逆転を語る」 著・石坂典子)